史に抗う女たち

西篤子

読売新聞社

歴史に抗う女たち　定価　一、一〇〇円

著　者――安西篤子
編集人――守屋健郎
発行人――大原規男
発行所――読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇
大阪市北区野崎町八の一〇　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二
印刷所――大日本印刷株式会社
製本所――大口製本印刷株式会社
第一刷――昭和五十六年五月十七日
第二刷――昭和五十六年八月四日

0093―703080―8715
© 1981, Atsuko Anzai
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

歴史に抗(あらが)う女たち　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

藤原道綱の母……7
ときめき 9　嫉妬 13　素通り 17　山寺へ 20　揺れる心 24　雨蛙 28
和泉式部……33
和泉守の妻 35　弾正の宮の訪れ 39　死別 42　橘の香 46　指弾 50　賀茂の祭 54　予感 58　いくのの道 61　子はまさりけり 65
陽明門院禎子……71
母一人子一人 73　文使い 76　その夜 80　内裏退出 84　あやめ草 88　心とけず 91
築山御前……97
無口な夫 99　巨木倒れる 103　お大の出現 106　息子の結婚 110　告げ口 114　御前谷 118

浅井お茶々……123
嫁ぎ行く初 125　心ならずも 128　茶々、母となる 133
お拾誕生 136　大坂城へ 141　その死 145
堀川波の鼓の女……149
中秋の月 151　鼓の師匠 154　燃える恋 158　夫の帰国 162
おたねの死 166　女敵討 171
月光院……175
武家奉公 177　絵島 180　召される 184　嫉視 188　罠 192
愛児の死 196
あとがき……201

歴史に抗(あらが)う女たち

藤原道綱の母

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ときめき

中の君は手鏡をのぞきこんでいた。

直径三寸八分（十一センチ）ばかりの、掌にのるほど小さい鏡だが、中の君の気に入りの品だった。あるとき、母の手筥の中でみつけ、一眼で欲しくてたまらなくなった。母がむかしから持ち伝えたものということだったが、中の君はむりにねだって、もらってきてしまった。鳳凰に唐草をあしらった背面の文様も古風で、「そんな古めかしいもの、若いあなたに似合わないわ」と姉の大君は笑ったが、中の君は平気だった。

鏡の中の自分の顔を、中の君はしげしげとみつめていた。磨いたように艶のある白い頬、聡明らしい広い額、ととのった目鼻立。鏡面には、稀にみる美しい女の顔が映っている。今年十九歳になる、藤原倫寧の二番目の姫君は、つとに美人の聞こえ高かった。

しかし、当の中の君は、必ずしも自分の容貌に満足していなかった。不安らしくみひらかれてこちらをみつめている眼は、大き過ぎるように思えたし、口元にはやさしさが乏しくみえる。そもそも、ふっくらとした丸顔が気に入らなかった。

中の君は花にたとえれば牡丹をみるように、明かるく華やかな美貌である。ところが当人は、宵闇にまぎれてひっそりと咲く紫の桔梗のような美しさが好きだった。女ならば、胸を病んであるかなきかに痩せ細り、終日、庭を眺めながら、恋人の訪れを待つ、そういう風情に惹かれる。

鏡に向かって、中の君は眉をひそめてみた。憂れわしげな表情をつくろうと努めた。が、匂うような肌の色や、強い意志を秘めた眼差が、それを妨げる。

がっかりして、中の君は鏡を置いた。

そのまま、手筥に凭れて庭へ眼を向ける。

折から四月も末近く、すでに梅雨の前触れか、ここ二、三日、雨がちだった。今日も、朝のうちはこまかい雨が降っていたが、昼過ぎにはあがり、夕方近いいまは、雲の切れ目から青い空がのぞきはじめている。

籬の卯の花はいま盛りで、ほの白くむらがり咲いていた。大君は昨夜、ほととぎすの声を耳にしたと云う。中の君が聞かなかったというと、ほほ、と笑われた。

「あなたは、ほんとに苦労がなさそうに、よく眠るのですもの」

姉の大君は、つい去年から、藤原為雅を通わすようになった。それで、まだ定まる夫のない中の君を、子供扱いするのである。

今日こそ、ほととぎすを聴きたいなどと考えながら、中の君は日の暮れ切る時分までもの思いに耽っていた。あたりが闇に沈みはじめたころである。中門に当って、ざわめきが起こった。人の声、それに馬の蹄の音がまじる。誰か騎馬で訪ねてきたものがあるらしい。

中の君は、ふと胸がときめいた。

最近、中の君に求婚する男があらわれた。父倫寧に申し入れているという。先日、中の君は母に呼ばれて、それとなく胸のうちを訊かれた。

相手の男の名を聞いて、中の君は少しおどろいた。それは、いまをときめく右大臣藤原師輔の三男兼家であるという。年齢は二十六歳。

早くから美しいと評判の中の君のもとには、云い寄る男も数多くいたが、大半は父と同じ、受領と呼ばれる中流貴族ばかりだった。兼家のような権門の公子は、はじめてである。

母は、「ああいうお家柄は、おつきあいも派手だし、いろいろ骨が折れるのではないかしら」と案じ顔だったが、中の君は別のことを考えていた。

中の君は、姉妹の中ではとび抜けて、歌をつくるのがうまかった。そのほか、音楽でも、衣服の染めや仕立でも、人よりはすぐれて巧みにこなす。どういう男の妻になっても、恥ずかしい思いはしなくて済むと思われた。

むしろ中の君としては、自分の持っている才能を、誇示する機会が欲しかった。母や姉のように、凡庸な夫を持ち、生涯、家庭に埋もれて暮らすのはつまらない。上流の人々とも交際し、名ある歌合の席などにも顔を出してみたい。

乳母や侍女たちの噂によれば、兼家は手蹟もよく書き、歌もなかなかうまいそうである。容貌、風姿もすぐれて男らしいと聞いた。

母から意中を尋ねられたときは、中の君もすぐ承知するようなはしたない真似はせず、扇で顔を隠して、黙っていたが、不承知でないことは、様子でも知れたであろう。

ところが、なぜか父も母もためらい気味で、すぐにはこの縁談を受け入れようとしない。

その理由も、中の君にはおおよそ、察しがついていた。

兼家にはすでに通い所があり、男の子も一人、生まれているという。両親はそのことにこだわっているのであろ

う。相手の女は藤原中正の娘といわれる。
しかし中の君は、自分が兼家の最初の妻でなくとも、かまわなかった。男を通わせるようになれば、必ず、誰よりも強く男を惹きつけることができるという自信があった。それで、この縁組を早く父が承諾してくれればいいのに、と思っていた。
いま、日暮を待ちかねたように、訪ねてきたものがあるのは、もしや兼家からの使者ではあるまいか。
中の君の予感は的中した。しばらくすると、母のもとから侍女が来て、中の君を呼んだ。行ってみると、果して、兼家のものらしい文を中にして、女たちが集い、ああでもないこうでもないと喋っている。
「あなたに、右兵衛佐（兼家）どのから、恋文ですよ。さあ、あけてごらんなさい」
姉が笑いながらすすめる。
とり上げてひろげて見て、中の君は意外の感に打たれた。
騒想文ならば、美しい薄葉でも使えばいいのに、そこらに有り合わせたらしい、なんの趣もない懐紙である。
評判に相違して、字も大してうまいとは云えない。まさか他人に代筆させたのでもあるまいが。
書かれた歌を一読して、中の君は更にがっかりした。
音にのみ　聞けば悲しな　ほととぎす
こと語らはむと　思ふこころあり
――あなたのお噂を聞くばかりではつまらない。じかにお眼にかかってお話がしたいものです。
身も蓋もないとは、こういうことを指すのか。求愛の文ならば、いま少し綾も彩りも、つけてもよさそうなものではないか。かねてあなたをお慕いして、袖は涙に濡れ朽ちましたとか、月をみても花をみても、思うはあなたのことばかりとか、月並ではあっても、それが一種の儀礼とされている。
いったい、兼家はどこまで本気なのだろうか。それとも、こちらをよほど軽く見ているのか。
中の君は、腹が立ってきた。兼家の文をそこへ投げ出すと、座を立って居間へ戻ろうとした。
母があわてて、呼びとめた。
「あ、ちょっとお待ちなさい」
そして、姉娘や古くからいる侍女たちと額を寄せて、兼家に返事をしたものかどうか、相談をはじめた。
若い姉は云った。
「このごろは、最初の御文には返しをしないのが、流行に

なっていますわ」
しかし、母は頭をふった。
「いいえ、それでは失礼に当りますよ。やはり、ご返事を差し上げた方がいいでしょう」
母としては、なんと云っても相手が右大臣の子息ということが、念頭を離れないのであろう。
兼家からの求婚に、一時は胸をとどろかしたものの、思いがけず手蹟も歌も拙いのに、中の君は少々、厭気がさしていた。
ところが母はあべこべに、兼家の求愛に浮わついたところの見えないのが気に入ったらしい。
「さ、早く歌を。お使いが待ち侘びていますよ」
母に促されて、中の君は渋々、筆をとった。返歌の方は、先ほど、兼家の歌を一眼見たとき、すでに心のうちにうかんでいた。

語らはむ　人なき里に　ほととぎす
甲斐なかるべき　声な古しそ

書き上げた文を母に手渡すと、中の君は母や姉の引き留めるのもかまわず、ひとり、自分の居間へ戻ってしまった。
侍女の手で、すでに大殿油が運びこまれている。その傍へ寄ると、中の君はまたも、手鏡をとり上げてみた。
髪の下り端に縁どられて、くっきりと白い顔が映っている。あいかわらず怯えたような大きな眼が、こちらを見返していた。
漠然とした不安が、中の君の胸に萌しつつあった。
兼家からあらたまった求愛の文が届き、母がそれに返事を書かせたからには、遠からずこの結婚は成立するに違いない。
最前、中の君は胸ときめかせて男の文を待った。しかし、求婚が現実のものとなってみると、嬉しいというより、怕れが先に立つ。
まだ男を知らぬ乙女の不安というだけではない。中の君は先ほどの兼家の文から、一種の不協和音を感じとっていた。ぼんやりとではあるが、兼家と自分との気質の相違を感じないではいられなかった。
——あの方と結婚して、うまく行くかしら。
中の君は、鏡の中の自分に問いかけてみた。くろぐろとした瞳は云いようもない不安と怯えを湛えて、大きくみひらかれていた。

嫉妬

兼家との結婚を中の君が悔いはじめたのは、男が通うようになって半年もたたない時分である。

四月のはじめに、例のほととぎすの歌をよこしたあと、兼家はしげしげと文を通わせてきた。かねがね中の君の評判は聞いていたものの、じっさいにその手になる返しの歌や筆蹟を眼にして、いよいよ「妻に」と思い定めたらしい。

中の君の方はあまり気乗りがせず、とかく返事を怠ったり、侍女に代筆をさせたりしたが、そうなると男の気持は、いっそう燃え上るものとみえる。

ついにその年の八月のある夜、二人は新枕を交わした。兼家は形式通り、三日通ってきて、そのあと、露顕（ところあらわし）と称する結婚披露の宴が、中の君の邸でひらかれる。そこへは父の倫寧や、兄理能・弟長能なども顔を出し、にぎやかに兼家をもてなした。こうして中の君は兼家の妻となった。

結婚の引出物のように、それから二ヶ月後の十月には、倫寧は陸奥守の職を授けられ、やがて任地へ出立して行った。

このころの兼家は、中の君に優しかった。頼みとする父の離京に、中の君が思い屈していると、「いまはもう、この私をこそ頼みにお思いなさい」と慰めてくれる。兼家の言葉を待つまでもなく、中の君としては、夫のほかに頼る人もない思いだった。

ところが、その夫との仲が、とかくしっくりいかない。

中の君にはひとつの夢があった。昔物語の中の姫君のように、男に死ぬほど想われ、稀々に通わせるときには、たがいに血を吐くような恋の言葉を洩らし合う。そういう仲（なか）合（らい）こそ望ましかった。

けれども、中の君の夫となった兼家の態度には、情熱の擒（とりこ）となった恋人らしいところは、微塵も見られない。仮にも求婚時代、「鹿の音も聞えぬ里に住みながらあやしく合わぬ目をも見るかな」などと詠んできたのが嘘のように、中の君に対してわがもの顔にふるまう。閨のうちにおいても、もう百年も夫婦であり続けた男のような顔を見せる。

なにが厭と云って、これほど中の君の癇にさわるものはない。

それは確かに、中の君は兼家の妻の一人である。もはや、ほかに男を持ちたいとは思わない。

しかし、表面だけでも「恋い焦れてようやく逢うことができた」とか、「他の男に心を移しはしまいかと心配でならない」といった様子を見せてほしい。安心し切って、古女房のように扱われるのは、我慢がならない。

結婚前、中の君は兼家の最初の妻、中正の娘で時姫と呼ばれる女のことは、歯牙にもかけていなかった。兼家が自分のもとへ通うようになれば、必ずやあちらからは足が遠のき、自分一人を愛してくれるであろう、と予想していた。

ところがいまや中の君は、時姫と同列の古妻の一人に過ぎない。

時姫から兼家を奪えなかったばかりではない。結婚後一年ほどたつうちに、こんどは新しい女に兼家を奪られそうな形勢になってきた。

ちょうどそのころ、中の君は懐妊し、八月の末に男の子を生んだ。兼家にとっては二人目の男児である。兼家はたいそう喜んで産養いなども、こまごまと気を遣ってくれた。

そうした兼家の情愛に眼をくらまされたわけでもないが、中の君は夫の関心が他の女に向けられていることに、全く気づかなかった。

出産後、間もない、九月のある日、そこらにあった兼家の手筥を、なんの気なしにあけてみると、書きさしの手紙が入れてある。虫の知らせか、ひらいてみれば、まさしく、女にやる文の反故ではないか。

そのとき中の君は、おどろくより、「ああ、やっぱり」と感じた。結婚当初から、いつかこういう日が来るだろうと、予想はしていた。

とはいえ、やはり打撃ではあった。心の内で、その女が兼家の求愛を退けてくれるよう、祈るばかりである。

しかし、中の君の両親が兼家を婿として喜び迎えたように、その女の家でも、右大臣の御曹司の求婚を拒みはするまい。

果して十月の末近く、三夜続けて、兼家の訪れを見なかった。習俗通り、三日間、女の家に通い、結婚を成立させたのであろう。これで女は、兼家の浮気の相手ではなく、時姫や中の君同様、妻の一人と世間からも認められることになる。

中の君にとっては、苦しい月日がはじまった。

娘のころ、世間知らずの中の君は、男と女の愛を、もっと別のものとして考えていた。才能もあり、人からもすぐれて美しいと讃えられていた中の君は、自分が心を傾けて愛するなら、夫は必ずや、自分を重んじてくれるであろ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com